

# みちるのひかり

くまじめ一途系後輩キャラにたっぷり愛されちゃう百合音声く

特典用 前日譚ミシナリオ&アフレームボイス集 台本

作者名：新條 にいな

ninashinjou@gmail.com

①『プロローグ・二年前の四月』新しけい出会いには新しけい服を』（420文字）

二年前の四月。

主人公とゆずこ、一緒にショッピングへ訪れ、洋服屋にいる。

ゆずこ、このところ元気のない主人公を、無理やり連れだす形でやってきた。

しかし、主人公はさつきから暗い色の服ばかり選ぼうとしている。

主人公は、恋人と別れた直後。

ただでさえ恋愛に後ろ向きだった主人公は、失恋により、完全に何もかもに対してあきらめモードになってしまった。

気が小さく心配性のゆずこは、すっかり妄想が肥大している。

主人公が人生を悲観して自殺してしまうのではないかと内心不安でしょうがない。ゆずこ、心配になって声をかける。

SE・B 1の1

喧噪 冒頭5秒くらいまで流し、それから台詞。全編で小さく流す

「ねえ！……ちょっと待って。

『その服、なんか喪服みたいだよ。やめなよ』と言いかけるが、不謹慎なのでやめる。一瞬言葉を選んで、間が空く。ゆずこは失言が多いのを自覚しているので、こういった間が多

い

「こっちにしない？ 爽やかな、春の色！」

ゆずこ、適当に言ったので、とても主人公に似合うとは思えない色を選んでしまう。慌てて、別の服を指さす。

「じゃなかったら、あっち！

さつき一回手に取って、棚に戻した服。気に入ってたんじゃないの？

【主人公の言葉を復唱し。ゆっくりめに】

『似合わないと思う』？

そんなことなくない？」

それは、青のストライプのブラウス。

よくあるデザインだが、ゆずこは主人公に似合うと感じる。

なので棚から手に取り、主人公の身体に服を当てて言う。

SE・B 1の2

服がかかっているラックから、ハンガーを外す「カチャ」という音

※ももとの音が大きいので小さめに

「よく似合うので、声が明るくなる」  
似合うよ！

このデザインなら、店の制服の下に着ていいんでしょう？  
これ着たあんたを見て、めろめろになるお客さんがいるかもよ」

ゆずこがそう言った途端、主人公の顔が暗くなる。

『ゆずこ。私、もうそういう、恋愛とかは……』と主人公。

ゆずこ、気を付けていたのに、結局失言してしまう。

墓穴を掘ったと思いつつ、励ますつもりで苦し紛れに話を広げる。

それはその場しのぎの、深い意味もなく言ったことだが、のちに本当になる。

「その場しのぎではあるが、これ以上失敗しないように、努めて冷静に話す」

いや、恋愛に限った話じゃなくて。もっと……広い範囲の話！

あんたの新しい友達になる人かもしれないし。

ずっと一緒に働いていく人かもしれない。

つまり。どこに運命の出会いがあるかわかんないんだから。

せめて、いつもいい感じの服を着てほしいってだけ！

【※マークから次の※マークまで願いを込めて、占い師のような気分で】

※……たとえば、この服を着た日。

『城倉珈琲店（しろくらコーヒーてん）』に来た、お客さんに対して。

あんたが何の気なしにした親切が……。

巡り巡って、あんたをととも、幸せにする。

そんなことが起こる！ 気がする。※

【完全に口から出まかせだが、主人公に明るい気持ちになってほしいのは本当。ゆずこ自身  
だんだん不安になってきて、最悪の場合も保証する、というつもりで言う】

もし、特に何にも起きなくて。

独りぼっちだって思った時は……あたしがいるから。

だから、これにしてみない？

【『わかった。ありがとう、ゆずこ』と言われて嬉しくなり、安堵する。思い付きで言った  
ことではあるが、未来予知になればと心から思う】

よし！ 試着して来い！」

\*\*\*

②『二年前の六月』はじめて話した日（232文字）

①から約一か月後。六月上旬の、比較的すいている平日の午後三時ごろ。  
主人公、仕事中。  
主人公、あれからこの前買ったブラウスを何度か着てみたもの、特にそれらしい出会いはなかったと感じている。  
今日も着てみたが、いつもと何も変わらない。

SE・B2の1 環境音（小さな音でずっと流す）

SE・B2の2 コン、コン、と主人公がゆつくり階段を上る音（0―8秒目くらいまで、音声よりゆつくり目に少し静かにお願いします）

SE・B2の3 主人公がみちるの席（向かう足音）※0―7秒目くらいまで

そんな折、二階席の客へお冷を配りに行くと、最近よく来ている少女が、ひとり声もあげずに泣いているのに気づく。

主人公、思わず泣いている姿を凝視してしまい、少女と目が合う。  
彼女こそが羽鳥みちる。

みちる、泣いてる姿を見られ、申し訳なさそうな、怯えたような声を出す。

【まさか目が合うとは思わず、申し訳なさそうな、怯えたような声で】  
あつ……。

【無理に泣き止もうとして、声を殺して、ぐす、と鼻をすすする】  
すいま……せん……」

みちるは、地域でもそこそこの進学校『公立 一の森』に通っている。  
みちる、一の森に無事合格し、四月から通い始めたはいいものの、入学式直後に体調を崩してしばらく学校を休んでしまい、クラスになじむのに失敗してしまった。  
そのため、六月になっても友達ができないことを深く気に病んでいた。  
主人公の働く『城倉珈琲店』は、みちるにとっては通学路。  
そのため、放課後は時折この店を訪れるようになっていた。

主人公、泣いているみちるに、ごく小さな声で、他の客に聞こえないよう『大丈夫？』と声をかける。思えば彼女は、いつも一人で来店していることに気づく。

「ありがとう、ございます。大丈夫、です……。」

特に何かあったとかじゃ、ないので……。

【また、ぐす、と鼻をすすする】

ほんと、ごめんなさい……」

主人公『大丈夫』とは言われたものの、みちるのことが気になる。  
ポケットに飴を入れていたことを思い出し、取り出してみちるにそつと差し出す。

SE：B2の4

コトン、と机に飴を置く音

※『コカ』という音がしますが『コ』の部分のみでお願いします

「『あげる』と言われ」

あつ……。

【『他のお客さんには秘密ね。いつも来てくれてありがとう』と言われ。泣きそうな声で  
あ、ありがとうございます……！ はい。時々。来させて、いただいてます……。

【ずっと伝えたかったので、思わず店の感想を必死に述べる】

このお店。とても、すてきで。

来ると、落ち着くって、いうか。

ほっとするんです……。

すごく、好き。なんです。

【『いつでもおいで。何時間でもいいから。あそこの一人用の席、用意しておいてあげる』と言われ】

本当ですか……？

【主人公が優しいので、また涙が出てくる。泣きながら】

いつでも来て、いいんですか……？

【結局また泣き出してしまいが、泣く声そのものは小さい】

ありがとう……います……。飴も、ありがとう……います……。嬉しい、です……。

【やっと少しだけ笑顔になる】

大切に……食べます……」

\*\*\*

③『二年前の八月』アルバイト志望です』（66文字＋243文字）

八月。世間は夏休み。

主人公、休みだが店にいる。ゆずことコーヒーを飲みながら談笑中。

店の入り口には『アルバイト募集』の張り紙が出ている。

SE・B3の1

環境音（小さな音でずっと流す）（ごく小さめに）

SE・B3の2

コトン、と机にグラスを置く音

「『ひみつのかれん』く外国人お姉さんキャラにたっぷり愛されちゃう百合音声く」のヒロイン、カレン・ラングフォードのまねをする。『二年生の七月』告白』参照」

暑くなってきたわね。お話ってなあに？

【普段の口調に戻って】

……これ、誰のセリフだっけ？ まあいつか。

しかし偉いですなあ。休みの日も店にいるなんてさ。

ああ、アルバイトの求人出してるの。

店に直接問い合わせがあるかもしれないから、つい待機しちゃってるってわけね。

【誰か気になる人がいるのかと思い、いたずらっぽく】

……誰か、心当たりでもあるのか？ 応募してきそうな人に。

『そんなじゃない？』

【嬉しそうに】

ふーん、どうだか。で、話ってなんだっけ」

主人公、夏休みに入ってから店に現れないみちるのことが気になっている。

しかし、よく考えると、彼女について何も知らないことに気づく。

制服すらどこの学校か見当もつかないため、ゆずこに聞いてみることにする。

「うん。水色のブラウスの、ブレザーの学校？

一の森（いちのもり）じゃない？ 今年に入って制服変わったらしいよ。あそこ。

一の森の子となんかあった？」

主人公、ゆずこにみちるのことを話そうか悩む。

単純に『最近よく来てくれている子が、一の森の生徒のようだ』とさえいい話なのだが、なぜか気恥ずかしい。

するとそのとき、店の扉が開き、みちるが入ってくる。

夏期講習の後なので、夏休みだが制服を着ている。

SE : B 3 の 3

店の扉が開く音

SE : B 3 の 4

みちるの足音 ※3秒くらい

【息を切らして】

あの！ 表の張り紙を見て来ました！

い。いつも来てる……羽鳥です！ ここで働き、たいです。履歴書持ってきました。面接。受けさせてください！」

しばしの間。

【みちるの制服姿を見て、すべてを察する。やや小声で】

……なるほどねっ」

\*\*\*

④『二年前の八月』ご挨拶』

【はきはきと。しかし、うるさすぎず、フレッシユな印象で。「アルバイト先に、こんな

子が新人アルバイトとしてやってきたら、働きやすそうで嬉しい」と思うような感じで。

みちる自身は内心とても緊張している。「はとり」と「みちる」の間で「呼吸置く」

羽鳥（はとり）みちるです！ 公立一の森（いちのもり）の一年生です。

【少しでも自信なさげに】

接客のアルバイトは初めてです……。

【正直なところ、うまくやっていけるかは不安。しかし、それ以上に主人公と一緒に働くという夢が叶って嬉しくてしょうがない。その気持ちを主人公に伝えたい】

でも、先輩と一緒にこのお店で働くのが、夢でした！

先輩。今日からご指導のほど。よろしく願います！」

\*\*\*

⑤『二年前の十二月』日頃の感謝を込めて』（427文字）

十二月。夜遅く。

主人公、仕事を終え、更衣室へ向かう。

ひとときわ激務だったので、肉体的にも精神的にも疲弊している。

主人公は更衣室では着替えない。しかし、ロッカーは利用している。

SE : B 5 の 1

環境音（小さな音でずつと流す）

SE : B 5 の 2

足音 ※10秒目まで

SE・B5の3

木の扉を開ける音

主人公、更衣室の扉を開けると、先にあがったはずのみちるが待っていたので驚く。  
みちるは、両手に小さな手提げ袋を抱えている。

主人公に一礼すると、みちるは緊張した面持ちで話しかけてくる。

【ドキドキと待っていたら、急に扉が開いたので顔を上げる。声が上がっている】

……あ！先輩！お疲れ様です！

【『羽鳥さん、どうしたの？もう帰ったんじゃないの？』と聞かれ。恥ずかしさで

言い出しづらく、少し間が空く】

先輩を、待ってました。

【少し間が空く】

あの！これ、受け取ってください！

SE・B5の4

がさ、と手提げ袋を差し出す音 ※0―3秒くらい

【主人公が『なんのプレゼントかわからない』という顔できょんとしているの。聞かれる前、に慌てて答える】

中身は、お菓子です。

お仕事で、疲れてると思うので……甘いもの、どうぞ！

先輩。いつも本当にありがとうございます。

【『ミス』を言いづらそうに、申し訳なさそうに】

この前、ミス。しちゃった時も。

先輩がすぐ気づいて、代わりに対応してくださったから……トラブルにならずに済みました。

あの時は、本当に申し訳ありませんでした。

……でも、優しくフォローしてくださって。

『こういう時のために、私がいるんだよ』って言うてくださって。

【思い出し、泣きそうになる】

本当に嬉しかったです……。

だから、その。

本当は、お誕生日に何かお渡しできたら、って思ってたんですけど。

【デフォルト主人公の場合誕生日は5月なので、8月にバイトを始めたみちるはまったく間に合わなかった。落胆した調子で】

今年はまだ間に合わなかったみたいなので……。

日頃の感謝の気持ちということ。



【勇気を出して】

受け取って、ほしいです!」

主人公、突然の贈り物に驚くが、素直に嬉しい。

みちるはアルバイト経験がなく、最初こそ不慣れだったが、素直で勤務態度が良く、非常によく働く。最近は特に接客態度が良くなってきた。

なので主人公は『みちるを雇ってよかった』と心から思っている。

主人公、『ありがとう。嬉しい。いただくね』と笑って受け取る。

「あ……! ありがとうございます!」

【『中身、今開けて見てもいい?』と聞かれ。中にはお菓子だけではなく、手紙も入っているの、見つかるのが恥ずかしい】

あ、それは、その……。

ごめんなさい、中身はおうちに帰ってから見ていただけると、嬉しいです!

【恥ずかしさで早口になる。『お疲れさまでした』まで言い切って、早く逃げ出したい】

すみません、失礼しますっ! お受け取りいただきありがとうございます! お疲れ様でした!」

SE : B 5 の 5

一歩一歩、少しずつ主人公から逃げる音

SE : B 5 の 6

バタバタと走り去る音

主人公、きょんととして見送る。

中身が気になり、みちるは去ってしまったことだし……。と、思わず開ける。

中には、お菓子の入った箱の他に、手紙も入っていた。

主人公、逃げるように去っていったのはこれか、と思いつつ、心が温かくなる。

なんだか、疲労まで少しとれたような気がする。

\*\*\*

⑥『一年前の一月』はじめての訪問（973文字）

年が明け一月。世間は冬休み。

北国なので、冬休みが長い。学生は一月下旬まで休みが続く。

主人公、今日は先日のお菓子のお礼を兼ねて、みちるを自宅に招き、夕食をこちそうする事になっている。

過去の経験から警戒心が強く、あまり人を家にあげない主人公だが、みちるであれば問題ないと判断している。

主人公にとってみちるは、従業員たちの中でもかなり親しい存在になりつつある。

SE : B 6 の 1

みちるが主人公の自宅のチャイムを鳴らす音

【※マークから※マークまで緊張した面持ちで。④並みに声が震えている】

※こんばんは。羽鳥です！

SE : B 6 の 2

ガチャ、と主人公が家の扉を開ける音

SE : B 6 の 3

ガチャ、と主人公が家の扉を開める音

みちる、がちがちに緊張している。

年が明けてから初めて主人公に会うというのもあるが、何より主人公の自宅で二人きりで過ごすというのが大きい。

今日のことは、家族にも話している。

羽鳥家では、主人公は『友達ができず、不登校になりかけていたみちるを救ったヒーロー』のような存在。

みちるは家でも主人公の話ばかりしているので、みちるの父親も母親も、主人公に非常に詳しい。

特にみちるの母親は主人公のことが大好きで、みちるが主人公宅に招かれたと聞いて大騒ぎ。

慌ててお土産のお菓子を買ってきた。

「明けておめでとうございます。先輩！

本日はお招き、ありがとうございます！

あっこれお菓子です。母がよろしく願いますと……！

【『ありがとう。でも、悪いな。うちでご飯食べるだけなのに……』と言われ】

とんでもないです。先輩には本当にお世話になってるので。

うちの両親、わたしがお店の話、家でよくしてるせいか。先輩のこと大好きで。

今日、遊びに行くって言ったら、持っていきなさいって……。  
どうぞお召し上がりください。

【『じゃあ、頂戴します。あがって?』と言われ】

はい！ お邪魔します！※」

SE・B 6の4

靴を脱ぐ音

SE・B 6の5

二人が家の中に入っていく足音 ※5秒くらい

主人公、リビングにみちるを通し『飲み物を出すから座っていて』とキッチンへ向かう。  
みちるは従い、ドキドキしながら主人公の家を眺めている。

一見落ち着いて座っているように見えるが、内心は『写真撮って帰りたい!』『先輩のにおいがする……!』『先輩の家、おしゃれかよ! ミニシアター映画に出てきそうな家だよ!』と大興奮。

主人公の自宅がイメージ通り上品でかわいらしいものだったので、ますます主人公への憧れが強まっている。

「あつ、はい。恐れ入ります。じゃあこの辺に座って……待ってます」

SE・B 6の6

みちるがリビングの椅子の近くに座る音 ※0—3秒くらい

「先輩のおうち、すごく素敵ですね……! 可愛くて、おしゃれです!」

先輩って、こちらにお住まいだったんですね。

お店の裏手にある、大きなおうち……。

すごく素敵な場所だから、一体、誰が住んでるんだろうって思っていました。

【『恐らくそうだと思うが、確証はない。少し自信なさげに』

先輩はここに、お一人で?

【『そうだよ。祖父の持ち物なんだけど、今は私が一人で住んでる』と言われ】

やっぱりそうなんですね……こんな広くて、映画に出てきそうな家に一人暮らしなんて、羨ましいです!

友達も、先輩のこと『デキる女』って感じでかっこいいね』って言ってましたよ!

【『ああ、この前お店に来てた子たちのこと?』と聞かれ】

そうです! あの二人です」

主人公、年末に店に来ていた女子二人組のことを思い出す。

来店時にみちるに手を振っていたのを見たので、友達なのかと思っていた。

二人はみちるとは容姿の雰囲気こそかなり違っていたが、とても仲がよさそうだった。

主人公、はっきりと本人には聞かなかったものの『みちるは学校生活に悩んでいたのでは？ だからあの時泣いていたのでは？』と想っていたので、安堵する。

「はい、実は先輩と初めてお話した時、わたし、学校に友達が一人もいなくて。

【『ぼっち』を言いづらそうに。『ぼっち』は『ひとりぼっち』の略語】

ぼっち、だったんですけど……。

後期になってから、選択授業が始まって。それがきっかけで、友達ができたんです！

あの時はご迷惑おかけして、本当に申し訳ありませんでした。

でも、今は学校も、すごく楽しいです！」

主人公、みちるの嬉しそうな笑顔に心からホッとする。

みちるが幸せそうだと、自分も嬉しいと感じる。

『そっか。よかった』と微笑んで、飲み物を差し出す。

SE : B 6 の 7

主人公が飲み物を注ぐ音

SE : B 6 の 8

コト、と机に飲み物を置く音

「あつ、ありがとうございます……。

【少し間を置き、ドキドキと切り出す】

あの、先輩。先日はありがとうございます。

お菓子と、一緒に入れた、手紙……読んでくださって。

お。お返事までもらえちゃって。

『お返しに、うちでご飯でもどうですか？』って言っていただけるなんて、夢みたいです。

手紙にも、書きましたけど……先輩はわたしの憧れなので。

今日一緒に過ごせるのが、とてもハッピーです！

よく、お店の皆も遊びに来たりしてるんですか？

【『ううん。呼んでない。ここに住んでること自体、私のいところで、お店のバリスタの金剛寺さんしか知らないよ』と言われ驚く】

えっ？ そうなんですか？

先輩がここにお住まいなのは。他はバリスタの金剛寺（こんごうじ）さんしかご存じでない？

【自分が場違いのような気がして焦る】

わ、たし。来てもよかったんですか？」

金剛寺とは『城倉珈琲店』でバリスタを務める主人公の一回り年上のいとこの男性。明るく親しみやすい性格のオネエで、筋肉質でケンカがめっぼう強い。

『城倉珈琲店』は夜間も営業しているので、店の用心棒的存在でもある。主人公、続いて、この家についての説明を始める。

『羽鳥さんはいいの。』

女の子だし、お人柄もわかってるし。でも、他の人にはあまり言わないようにしてる。女一人だから、怖いこともあるし。

ここ、もともとは店のオーナーでもある祖父の持ち物なんだけど……。

周りの人は、今でも祖父がここに住んでるって思ってるみたい。

だからそういうことにしてる。

お店の皆にも、お客さんにも。

私がここに住んでるのも、今日ここに来たことも、秘密にしてね』と話す。

「あ、そうですね……。女性で、お一人だと、不安なことも多いですね」

みちる、主人公と自分だけの秘密ができて、気分が高揚する。

みちる、とつくに主人公に恋しているが、恋人になるのはまず無理だろうと考えていた。

だが、今の話で『もしかすると少しは望みがあるのでは？』と期待してしまう。

嬉しさのあまり、声が思い切り明るくなる。

「はい！ 秘密にします！」

ふふ、先輩と秘密……嬉しいなあ。

あ、の。先輩。わたし、先輩よりだいぶ年下だし……。

お話してて。子どもだなんて思うこともあるかもしれないですけど。

これからも親しくさせていただけたら、嬉しいです！

【『「ちらちら」そよろしくね。今日は楽しんでいってください』と言われ。とても嬉しくなる】  
ありがとうございます！ はい、では、いただきますーすー！

\*\*\*

⑦『一年前の五月』わたしに甘えてくれませんか?』(518+407文字)

五月。天気の良い夕方。

主人公、③と同様に、店でゆずこと会っている。

主人公とみちるはあれからすっかり親しくなり、時々会って話す関係になっている。

主人公、仕事中は『羽鳥さん』のままだが、仕事外では『みちる』と呼ぶようになっていく。

みちるはもうすぐテスト期間。

今日はアルバイトは休みなのだが、主人公に借りた本を返しに店まで来るという。

主人公、ゆずこと談笑しつつ、みちるが来るのを待って少しそわそわしている。

SE・B 7の1

外で鳥が鳴く音 ※0―9秒目くらいまで。小さめに

SE・B 7の2

環境音(小さな音でずっと流す)

「『んーっ』っと伸びをして、窓の外を見ながら」

んーっ。すっかり暖かくなりましたわねえ。

今年、ほんと寒かったよね。四月になっても雪残ってたし。

へえ、週末もみちるちゃんと会ってたんだ?

一冬でずいぶん仲良くなったのねー。

いや、お互い休みの日でも、やっぱりこの店で茶あ飲んでるあたしらも。

相当仲良しだけどネ……。

あの子ーの森(いちのもり)の……先月二年になったばっかか。

うちらと何歳差だ? ちょっと歳離れてるよね?

でも話合うんだ! いーなー、そういう友達」

ゆずこ、去年の今頃はふさぎ込んでいた主人公が、みちると親しくなっていて以来随分明るくなったのが嬉しい。

『もしか、①で自分がした、あの予言は的中したのか?』と考えている。

「あの子いいよね。真面目だし。」

どっちにしろ。あんたが家にあげるなんて、よっぽど気に入ってるんだね」

そこでみちるが来店してくる。

SE・B 7の3

店の扉が開く音

「おっ、噂をすれば本人が。」

「おい。みちるちゃん、ここだよー」

みちるに貸した本は、主人公にとっては特別なもの。

自分ととても境遇がよく似た女性の生涯を描いた本である。

なので、みちるがその本を読んでどんな感想を持つか、非常に気になっている。

主人公は本を読ませることで、みちるに自分のことを、間接的に知ってもらおうとしている。

「ゆずこさん、先輩、こんにちは！」

【みちる、本当は急いで返す必要はないのだが、一回でも多く、少しの時間でも、主人公に会いたくて持ってきた】

先輩、今日はお休みのところすみません……。

明日からテスト期間でお休みいただくので……お借りした本、お返ししに来ました。

その、すぐ感想を語り合いたい本だったので……早くお会いして、お伝えしたくて！

ゆずこさんもこの本お読みになりました？」

「読んだ読んだ。それさ。主人公があんまり……」

【『かわいそうで』と言いかけるが、本の主人公と主人公は非常に境遇が似ていることを思いつ出し、これでは見下しているようだと感じ『不運』と言葉を変える】

不運で！ 腹立っちゃったよ。

【主人公を指して】

読み終わった後『こんなのってあるか！』って怒り狂ってこの人に電話しちゃったもん。

ねえ、みちるちゃんはこの本を読んで」

ゆずこ、本の表紙を見て、主人公がなぜみちるにこの本を貸したかを即座に察する。

ゆずこ、主人公がみちるに自分の境遇を打ち明けようとしているため、まずこの本を読ませ、みちるがどう感じたか反応を見ようとしていると考える。

なのでみちるに『この本を読んでどう思った？』と質問しようとする。

しかし、そこで店の扉が開き、反射的に来店客の方を見て、ゆずこは息をのむ。

来店したのは、主人公を裏切って別れた、主人公の元恋人（※以降、『元恋人』とする）だったからである。

SE・B 7 の 3

店の扉が開く音 ※0—3秒目くらいまで

【信じられない。自分の目を疑っている】

ねえ。今入ってきたのって。あれって……あいつ……？

【声が低くなる】

なんで、来てんの」

SE・B7の4

ゆずこが椅子から立ち上がる音

SE・B7の5

ゆずこが元恋人のところへ向かう、こつ、こつという足音 ※8―13秒  
くらい

ゆずこ、元恋人に冷たい声で話しかける。

【低くて静かな声 ※過剰な印象にならないように気を付けてください】

……ねえ。あんた、何しに來たの？」

少し長めの空白。

十数分後。

主人公、店から逃げるように出て、更衣室に隠れている。元恋人の顔を見たくないあまり、ここまで来てしまった。

主人公、自分でも、なぜこんな行動をとっているのかわからない。

今日休みの自分はここにいるべきではないし、このままここにいると、他の従業員の迷惑になる。

だが、足が動かない。隅にしゃがんだまま、立てなくなってしまうている。  
そこに、みちるがやってくる。

SE・B7の6

ギィィ、とゆっくり木の扉が開く音

【心配そうに】

……先輩。大丈夫ですか？

【少し間をおいて】

さっきの人、ですけど。

【ゆずこと従業員たちが、瞬く間に追い出したのを思い出して、再来訪は無理だろうと判断する】

もう、来られないと思います。ゆずこさん、すごい剣幕でしたし。

金剛寺（こんごうじ）さんに、即、追い出されましたし。

うちのお店にはあんな筋骨隆々のおじさ……いや、オネエさんがいるんですから！ 安心、安心です。



【周囲の驚き方や、あつという間に追い出された雰囲気から、先ほどの客が、主人公と親しい人物であつたと察する】

あの人。……先輩と昔関わりのあつた、人なんですネ。

【おそらく主人公の元恋人である、と考える。いらいらするし、もやもやする。思わず『ゆずこさんと同じく、わたしもあんまりあの人好きじゃないです』と言いかける。しかしその前に、主人公が憔悴しきっているのに気づく】

なんか……。先輩？ 大丈夫ですか？

【『大丈夫だよ。ごめん、みちる。今日はもう帰って……』と言われ。普段は従うところだが、明らかにおかしい主人公の様子が気になる】

でも……。先輩、なんだか……」

しばしの沈黙。

主人公、みちるに説明すべきであるとなわっているが、声が出ない。

元恋人は、主人公の事情、つまり『過去の病気と手術により、妊娠・出産が難しいこと』『身体に手術痕があること』『手術痕は見せたくない』ので、交際しても肌は見せられない。したがって、セックスはしない』を理解したうえで交際を始めたはずの相手。

しかし最終的には『やはりセックスできないのはつらい』というよりも、主人公にいつまでも心を許してもらえていないようで悲しく、耐えきれない』という理由で別れた。つまり、主人公にも問題はあり、元恋人にも言い分はあるのだが、ゆずこはとにかく元恋人を毛嫌いしている。

また、別れる際に『もう店には来ない』と約束したのを破ったため、金剛寺が追い出した。

みちる、約束を破って現れた元恋人は、主人公とよりを戻すために来店したのだろうと考えている。なので、先ほどまでは元恋人に対し『なんと身勝手なのか』と強い怒りを感じていた。

みちる、正直なところ焦っており、頭の中は『元恋人に主人公を奪われたくない』という気持ちでいっぱい。主人公が、元恋人に心動かされているのではと、不安でたまらない。

しかし、こんな時だからこそ冷静に、ベストの対処をしなければ、自分は元恋人に確実に負けるだろうと感じている。

なので、主人公は今どんな気持ちで、何を欲しているのか必死で考える。

【「意を決して、主人公に従わず、声をかける】

あ、の……。考えたん、ですけど。

こんなのは、どうですか。

先輩は。別にわたしに甘えたり。頼りたいなんて思っていないけど……。

わたしが今『どうしてもお願いします』と言ったので。

仕方なく、わたしに付き合って。抱きしめられる、だけ。

しょうがなく……頭を撫でられる、だけ。

……って、いうのは……」

しばしの間。

主人公、目に涙を浮かべながら『ごめん、今だけ……』とみちるに身を預ける。

SE・B 7の7

どき、と主人公がみちるに身を預ける音 ※0—1秒にいかなくらい服を脱がせてる？ ような音が始まる前に止めてください

【信頼されているようでとても嬉しい】

先輩……」

SE・B 7の8

とん、とん、とみちるが主人公の背中を撫でる音 ※0—4秒くらいゆっくりめに

主人公、みちるに抱きしめられながら、堰を切ったように話し出す。

『昔親しくしてた人だった。でも、良い別れ方をしなかったから、今はもう会いたくない。

なのにどうして、今になって店にやってきたのかわからない。私はもう、顔も見たくない』と、涙ながらに語る。

みちる、普段とまるで違う様子の主人公に驚きつつ、話を聞き、主人公を落ち着かせることに集中する。

内心『よかった、主人公は元恋人とよりを戻す気はなさそう』『今主人公の近くににいるのは、元恋人ではなくわたしだ』と安堵している。

しかし、今優先すべきは主人公の不安を和らげることだと考え、実行する。

「はい。大丈夫ですよ。ここは安全です。あの人はもう来ません。

……もし、来たとしても。

【少し間が空く。本当は『わたしが守ります』と言いたい。しかし冷静に非力な子どもである自分一人では無理だ、主人公を助けられない。と悟り、言葉を変える】

……また皆が助けてくれます。だからもう、大丈夫ですよ」

\*\*\*

⑧『一年前の六月』習い事を始めました』（637文字）

⑦から二週間後。

主人公、ぼんやり近所を散歩しているうち、みちるの家付近まで来てしまった。

主人公、⑦の件で『みちるに醜態をさらしてしまった』と深く落ち込んでいる。

あの後みちるはテスト期間に入ってしまった、予定通りアルバイトには来ない日が続いている。

主人公はこの、みちるのテスト期間が嫌い。

いつの間にかみちると会えないこと、話せないことを淋しく感じるようになっていく。

しかし、以前テスト期間中に連絡が来た際『私と話しないで勉強なさい』と言ってしまった手前、こちらからは連絡できないし、当然みちるからも連絡はなかった。

会えない間にも何度もこの前のことを思い出し『あろうことから年下のみちるに泣きながら甘えるなんて。あの場では優しくしてくれたが、内心みちるは呆れているのではないか』という、悪い想像だけが膨らんでいく。

一方みちるは、あの日ゆずこと連絡先を交換し、主人公の様子は、ゆずこから聞いている。あれから元恋人は店に来ていないし、関係者は皆警戒しているので、おそらく安全だというのはわかっている。

なので、ゆずこの『主人公のことはあたしらに任せて。みちるちゃんはテストに集中しなさい』との言葉に従い、勉強に励んでいた。

みちる、あの日以来、自分の意識が大きく変わったのを感じている。

以前はただただ主人公を『憧れの人』『理想の人』と美化して信奉するばかりだったが、今は主人公も一人の普通の女性で、怖いものや苦手なものがあり、支えを必要としているのだと感じている。

自分がその支えになるためにはどうしたらいいか。そんなことばかり考えている。

その結果、『心身ともに強く優秀になり、主人公に何かあったとき頼れる存在になろう』という結論に至り、かねてから関心のあった武道を習い始めることにした。

テストも終わり、明後日からバイトに復帰するので、その時に話そうと考えている。

主人公とみちる、別々に歩いていると、通りで偶然出くわす。

SE・B 8の1 環境音（小さな音でずっと流す）

SE・B 8の2 足音（10秒くらい「あっ！ 先輩！」で足音が止まる）

【「遠くから主人公を発見して」

あつ、先輩！ こんにちは！

こんなところでお会いできるなんて！ わあ。今日はついてるなあ。

【『お元氣そうでよかった』と言いそうになるがやめ、普通に話しかける】

はい、テスト終わりました！ 明後日から、バイト復帰できますよ。

先輩はお買い物ですか？

【主人公が不思議そうに自分の荷物を見ているので】

ああ、これですか？

わたし、今日から空手習い始めたんです！ 今はその帰りなんですよ。

【普段は『お父さん』と呼んでいるが、主人公の手前、きちんとした言葉遣いをしたい】

父の知り合いに空手教室をやってる方がいて。わたしも混ぜてもらおうことになりました。

【『どうして？』と聞かれ。主人公はみちるに、スポーツをする印象がない】

『どうして？』と、言うと。

その、強くなろうと思って。

……いざという時のために？

だから、ひよろひよろの『もやしっ子』は卒業することになりました！

これから、強くなりますよ。もっと先輩のお役に立ちます！」

みちる、意気揚々と話してしまったが『習い事を始めたと言ったら、多忙と判断した主人公が、自分のアルバイト勤務時間を減らしてしまうのでは』と気づく。

みちるにとって主人公と会う時間が減ることは死を意味するので、慌てて補足する。

「あつ。もちろん、バイトは続けますよ！

これまで通り行くので……勤務時間は減らさないくださいね！

【少し間が空き。勇気を出して話す】

……あの。実はこれ。先輩のお陰なんです。

武道。元々、興味はあったんですけど。なかなか勇気が出せなくて。

でも。わたしが以前先輩に『やりたいことがあるけど、自分にできるか、続けられるか不安だ』ってご相談した時。先輩は、こうおっしゃいましたよね。

どんなことも、始めてみるのが大切だって。

もう少しまく行かなかったとしても、新しいことに挑戦する気持ちは、とても素晴らしいものだって……。

だから、始めてみることにしました。

わたし。先輩のお陰で前向きになれたんです！」

みちる、実は勇気を出して教室に通い始めたものの、今日一日体験してみて、スポーツが

苦手で身体も小さい自分が、果たして習い続けられるのかさっそく不安を感じていた。しかし偶然主人公に会えたことで一気に気分が明るくなり『今日は最高の日だ』と感じている。

主人公も、いつもと変わらぬみちるの言葉に不安がほぐれ、ほっとする。思わずみちるを夕食に誘う。

「『今日はこれから用事あるの？ もし時間があるなら、またうちでご飯食べていきませんか？ 空手の話も聞きたいし、久しぶりに、みちると話したいな』と聞かれ」

えっ？ 今日これからですか？

【必死で予定がないことをアピールする】

何にもないです！ 暇です！ すごく暇です！

わあ、嬉しいです！

【興奮のあまり『母』という呼び方にするのを忘れる】

い、今お母さんに連絡しますから。あ『お母さん』って言っちゃった。

【言い直しつつも、嬉しくてしょうがない】

母に、遅くなると伝えますので……ぜひ夕食、ご一緒させてください！

\*\*\*

## ⑨『一年前の六月』付き合えないの？』（595文字）

⑧から数日後。

主人公、今日はゆずこを自宅に招いている。

ゆずこ、⑧の件については、みちるから連絡があつたので知っている。

ゆずこ、主人公とみちるはもう、はたから見れば十分仲がいいし、ゆずこから見ても、みちるは信頼できる存在だと感じている。

だから、そろそろ主人公は、みちるに自分の境遇を打ち明けるべきだと感じている。

今日は絶対その話をしてやるぞ、と思いながら、チャンスをうかがっている。

SE・B9の1

ゆずこが飲み物を飲む音

SE・B9の2

ゆずこがカップを置く音

【「自然な感じを装って」

話したのー？ みちるちゃんに。

『何が？』って。白々しいぞ？

まあ何がと言いませんけど。

【『そうだ、この前主人公がみちるに貸していた本。あれは、主人公が秘密を話したいと思

っている何よりの証拠である！』と思い出す。あくまで自然な雰囲気装っているが、実際は必死で色々考えて話している】

あんたがこの前みちるちゃんに貸した本ってさあ。あたし覚えてるよ。  
あんたにそっくりな人が主人公の話じゃん。  
つらいことがあって、ひとりぼっちになって。

……でも、年下の素敵な人に出会う女の人の話。

ええ。そろそろ、正直になられたらよろしいんじゃないかということです。

もちろん、色々悩んじゃう理由もわかるけど。いいと思うよ、あたしは。

あの本は……本当にあった話だから。ハッピーエンドなのか微妙だし。

年下の恋人は、いつも完璧とは言えなくて。

一部の展開にはあたしも怒り狂いましたけど……あの本を貸したってことは、あんたはみちるちゃんに、自分のことを間接的にでも知ってほしい。そう思ったってことだね。

みちるちゃんは。あんたの話なら、楽しくない話でも、つらい話でも。真剣に聞いてくれると思うよ。

だから、話してみればいいと思うのです。

【『その後のこと』とはつまり、みちると交際するか否か、ということ】

その後のことはその後考えればいいじゃない。

今日来て思った。なんか明るくなったよね。この家。

【近くにあった、以前来た時にはなかったおしゃれな家具を指して】

前はこんなのなかったよね？

見え見えですよ……年上の、おしゃれなお姉さんを気取ろうとするあんたの魂胆が……。

見え見えなんだからさ。素直になっとけよ。

それに、もしなんかあったら、またあたしが喧嘩してやる。この前あいつが来た時みたい  
にね！

あ、それは大丈夫？ ふふ。……うん。あたしも大丈夫だと思う。

【『がんばれ』と言おうとして、無責任な言葉のような気がして言いかえる。これが自分にとって最大限できることだと感じている】

応援してるよ」

\*\*\*

⑩『一年前の七月』告白（830文字）

⑨から二週間後。

主人公とみちる、今日は外で会っている。

主人公、ゆずこのアドバイスを受けて、みちるにすべてを打ち明けることを決める。

ゆずこの言う通り、みちるは真剣に聞いてくれるだろうが、なぜだか主人公は不安でたまらない。

年下の友人に自分の境遇を打ち明けて『これからも仲良くしてください』と言うだけなのに、どちらかというと、主人公の気持ちは、片想いの相手に『自分にはこういう事情があるが、それでも自分と交際してくれますか』というのに近い。

一方みちるは、主人公がこれから何を話すのか、わかるようでわからない。

⑦の件を今でも申し訳なく思っているらしい主人公は、おそらく元恋人についての説明をしてくれるのだろう……。と考えているが、その割には主人公が緊張しすぎているような気がする。

そんなに二人はひどい別れ方だったのだろうか。それとも主人公は、元恋人にあんなに怯えるほどひどいことをされたのだろうか。

であるならば、元恋人、許さん……と思っている。

SE・B10の1

環境音 冒頭10秒くらいまで流し、それから台詞。全編で小さく流す

SE・B10の2

飲み物の中の氷が鳴る「からん」という音

「ドキドキと切り出す」

先輩。あの、お話というのは……。

『楽しい話ではないんだけど、みちるに聞いてほしい話があるの。今日はそれを伝えたくてお呼び立てしました』と言われ。思わず構える」

はい。なんとなくわかってます……。わかって、るんです。

詳しいお話を聞かなくても。先輩には、わたしに出会うまでに、たくさん辛いことがあった。

【言うだけで辛い。身を切られるような気分】

それが理由で。今は、あまり。恋愛とかには積極的になれない。っていうのも……。

『うん。そうなの。みちるには話さなくてもわかつちゃうんだね』と悲しそうに微笑まれ。

あれ？ これ、告白する前に振られる流れじゃない？ わたしこのままじゃ、流れで『先輩の良なお友達になりたいです』とか言っちゃいそうじゃない？ と内心真っ青になる】

だからわたし、その……」



みちる、主人公の口から改めて、今は恋人を作る意思がないことを知り絶望している。自分たちはやはり、年の離れた友達という関係で終わってしまうのか。と泣き出しそうになる。

みちる、主人公の言葉を受け止め『そんな前向きになれない点も含めて、先輩の支えになりたいです。先輩より年下だけど、わたし、先輩の信頼に足る良いお友達になりたいです』

と言えば、主人公の信頼を勝ち取ることができるだろうと感じる。しかし、主人公と交際できないのは仕方ない。でも、自分の気持ちを偽ることだけはしたくない、と感じる。

せっかく仲良くなれたのに、告白することで関係は壊れるかもしれないし、気持ちを伝えて迷惑に思われるのはとても辛い。アルバイトもきつと辞めることになるだろう。

だが、それでも嘘だけはつきたくない。この気持ちだけは大切に守りたい。と考える。

【告白する前に振られるのだけは嫌だ！ と慌てて】

……やっぱりお待ちください！ 先輩。わたし、お伝えしたいことがあります！

SE・B10の3

勢いあまって、みちるが机に手をぶつける「カタン」という音

SE・B10の4

みちるが慌ててかばんの中を探る音 ※フルで流す

みちる、手帳の中に入れている、②で主人公からもらった飴の包み紙を取り出し、見せる。

【②で主人公からもらった、飴の包み紙を見せて】

先輩。……これ覚えてますか。

【主人公はみちるの突然の行動にぼかんとしているだけで、もちろん覚えていてる。だが、黙っている主人公にみちるは『やっぱり覚えていてるわけじゃないよね』と感じ、苦笑してしまう】  
覚えてないですよ。先輩が、初めてわたしに声をかけてくださった時にくれた……飴の包み紙です。

『こんなものを』って思うかもしれないんですけど……わたしは、今でもこれが、大切な宝物なんです。

……あの時、先輩に話しかけてもらえて、本当に嬉しかった。『友達ができない。学校行きたくない』なんて、今じゃ笑い話ですけど。あの時は本当に辛かったから。

先輩。わたし、あの時からずっとあなたのことが好きです。

先輩がくれた、優しい言葉。貸してくれた本。一緒に食べたご飯の味。

どんな些細なことでも、わたしは全部覚えてます。先輩がくれるものは、全部わたしの宝物だから。

だから、何もいらないます。今までと何も変わりなくていいんです。



ただ、先輩が困った時や辛い時に……。

この人のことは頼っていいんだ。気軽に電話したり、急に呼び出していいんだって思える人に、わたしを加えてくれませんか。

【主人公が何か言いたげなのには気づいているが、一気に言い切る】

わたし、年下だけ。チビで、頼りないかもしれないけど……。誰よりも先輩が好きなんです。先輩がいるなら、何でもできる気がするんです。先輩の力になりたいんです！

だから……だから。

【『みちる……！』と、主人公が言葉を遮ったので】

……えっ？

【『待つて……話を聞いて……』と言われ、真面目に】

はい。聞きます。

【『正直なところ、みちるのことがどう思ってるのか、自分でもよくわからない』と言われ。落胆して。やはり自分はこれから振られるのだと思い込む】

はい……。そう、ですよ……わかってます。

【『でも、会えないときみしい。連絡を取らない時期は、なんだか退屈で』と言われ。食い気味に】

え？ それはわたしも一緒です！

【『すてきなことがあったら、一番にみちるに話したい。面白い本や映画があったら、みちるにも観てもらって、みちるの感想が知りたいって思う』と言われ】

わたしも！ わたしもです！

【『みちると、もっとたくさん一緒にいたい。抱きしめたり、好きだって言っていい関係になりたい』】

あっ……その……それは……？」

しばしの沈黙。みちる、状況が把握できていない。まとめるのに時間を要する。

「あの。話を総合すると。

先輩も。わたしと同じように思ってくださってる。

ということになるのでしょうか……？」

【『そのようです……』と、主人公が顔を真っ赤にして、小さな声で言ったので信じられない。思わずうめくような声を上げた後、感激のあまりいつもより大きな声が出る】

あ……あ……あ……。せんばーい！ 大好きです！

絶対、幸せにしますので……わたしとお付き合ってください！」

\*\*\*

⑪『一年前の十月』はじめてのキス（795文字）

十月のある週末。

主人公、体調を崩し、自室のベッドで寝込んでいる。

本来なら一人で治療に専念するところだが、今回はなんだか心細い。

うつる類のものではないため、思い切ってみちるに連絡を試みたくところ、みちるは即座にやってきた。

SE・B11の1

部屋の床をゆっくり歩く音

【体調の悪い主人公を気遣って、努めて優しく声をかける】

せんぱーい？ 具合、良くなりました？

うん。少し顔色が良くなれてますね。安心しました。

はい。うつる類のものではないと、わかっていますよ。

今朝、先輩が体調崩したって聞いて。

お母さんまで『お見舞い行く！』とか言ってたんですけど。それは止めたので大丈夫です。今日はわたしが。先輩のお世話をさせていただきますからね」

26

みちる、不謹慎ではあるが、主人公が自分に頼ってくれたことが内心とても嬉しい。交際を始めて四か月ほどが経つが、二人はまだ抱きしめあったり、手をつなぐ以上のことはしていない。

あの後、主人公の境遇を知ったみちるは、すべて納得の上なのでまるで気にしていないが、主人公は最近それを不自然に感じ始めている。

自分から言い出したことで、最初はその条件に安堵していたはずなのに、今は残念に思う自分がいる。

SE・B11の2

みちるがベッドの前に座る音 ※0—3秒目くらい

「『いめんね。わざわざ、来てもらっちゃって』と言われ」

いいんですよ！ こういう時のために、わたしがいるんです。

……この言葉、覚えてらっしゃいますか？ 昔、先輩がわたしにおっしゃった言葉です。

【⑤を参照。当時を思い出して、しみじみと】

あれは、嬉しかったなあ……。

【少し間が空く】

最近思えます。わたし、先輩のことが大好きですけど。きっと、先輩とどうにかなりたかったわけじゃなくて。

ただ、わたしにたくさんのをくれた先輩に……。  
何かお返しできる人になりたかった。それだけなんだって。  
今日は少しそれが叶ったみたいで、嬉しいです！」

# SE・B11の3

みちるが立ち上がる音 ※0―3秒くらい

「さ、眠っててください。わたし、あっちでゲームしてますから。  
してほしいこととか、欲しいものとかあったら、すぐおっしゃってくださいね。  
ご用意しますから！」

【『声を出しづらかったら、メールを送ってくれてもいいですよ』と言おうとして』  
声を出しづらかったら……え？」

主人公、昔少し親切にただけなのに、それだけで自分を好きだと言って、ずっと何の見  
返りもなく尽くしてくれるみちるがたまらなく愛おしくなる。  
気を遣って隣の部屋へ移動しようとするみちるを、思わず『してほしいこと、ある……』  
と呼び止める。

「『手を握ってほしいです』と言われ。嬉しくなる。主人公が、恥ずかしがったり、照れて  
いるときは敬語を使うことを、みちるはもう知っている」  
ふふ……こうですか？ わかりました。先輩が寝ちやうまで、こうして、手を握っていま  
すね。

手繋いでると。すごく、安心しますよね……。  
【『まだお願いしたい……』と言われ。嬉しくなりつつ、おそらく『寝ても手を握っていて  
ほしい』くらいのことかな、と考える】  
え？ まだお願いが？ はい！ なんなりどうぞー！」

主人公、みちるの手を握り『みちるとキスしたい』とつぶやく。  
みちる、予想だにしないお願いだったので、驚きのあまり固まってしまふ。  
しばしの沈黙。

「えっ……それは、いいんですか……？」

【『これは、断ってもいいお願いです。私がしたいだけだから』と言われ。早口で』  
断るわけなんです。

【『キス』を言いづらそうに】  
先輩と……キス。したいに決まってるじゃないですか……」

「『目を閉じて』と優しく言われ、従う」

先輩……はい……。

【少し間が空いてからふれるだけのごく短いキス】

ちゅっ……」

主人公とみちる、手をつないだままキスする。

みちる、突然の出来事に、キスした後でもこれが本当に現実か信じられない。

自分は夢を見ているのでは、と感じる。

【嬉しいのあまり、声が震える】

あの。先輩……嬉しいです……。

もう一回。したいです……。

【返事を待つ前に、一回どころか、三回キスされる】

ちゅっ。ちゅっ。ちゅっ……ん……。

【少し間が空いて。次第に主人公とキスした実感がわいてくる】

あ、あの。わたし、今、初めてキスしました。いやもう……四回？」

主人公、喜びのあまり顔を真っ赤にし、目を潤ませるみちるが可愛くて仕方がない。  
さらにもう一度キスする。

「あっ……ちゅっ。

【幸せそうに】

これで、五回。ですね……。

【『隣の部屋へは行かないでください。このまま、手を握っていてください。心細かった……みちるが来てくれて、本当に嬉しかった。今日は……』と言われ。主人公が最後まで話す前に答える】

はい……。あっちの部屋にはいきません。ずっと手をつないでいます。今日は……泊まっていますから。

何でもお願いしてください。体調が良くなるまで。ずっと、ずっと先輩のそばにいます。

【声が震える】

だから……。

【『もう一回キスしてくれませんか』と言う前にまたキスされる】

ちゅっ。

【少し間が空いて。泣きそうになりながら】

先輩。大好きです……」

\*\*\*

⑫『今年の三月』 大丈夫ですよ、先輩』（309文字）

三月の真夜中。

主人公、泊まりに来たみちると一緒に眠っていたが、悪夢を見て目を覚ます。

内容は思い出せないが、目を覚ますと涙を流していて、汗をびっしょりかいていた。起き上がって顔を洗い、着替えて布団に入るが、まだ眠れない。

しかし『悪夢を見た』程度のことのみちるを起こす気にはなれないし、そういったことをして許されるのは、自分よりもっと若い女の子だけだろうと思う。

なので、ただみちるの眠る姿を隣でぼんやり見つめていると、みちるが目覚めます。

SE・B12の1

がさ、と衣擦れの音

【寝ぼけている】

……ん？先輩……？起きて、たんですね……。

【『うん。目が覚めちゃった』と言われながら、優しく頭を撫でられて】

……ふふ。

【『眠れなくなっちゃったから、みちるの寝顔見た』と言われ。少し間が空いてから】

もしかして……怖いこと、思い出しちゃったんですか？

それで眠れなく、なっちゃってたんですか？

【優しい声で】

起こしていいのに。

【『わかるの？』と静かに聞かれて】

わかりますよ！わたし『先輩マニア』ですから。

隠したって。先輩のことは何でもわかってやうんです。ふふ

SE・B12の2

みちるが主人公を抱きしめる音 ※0—2秒目くらい

【真剣に、ささやくように優しく】

大丈夫です……大丈夫ですよ、先輩。

【あえて『わたし』ではなく『みちる』と言って、自分の存在を強調する】

みちるがここにいます。

何があっても、絶対に先輩のことが好きで。絶対離れていけない人がここに一人いる。そう思うと……少し、安心しませんか？

頼りない、わたしかもしれないけど。先輩が『いやだ』って言ったって……。

【手を握って】

ほら。わたしは。先輩の手を放しません」

SE・B12の3

みちるが主人公の背中をとん、とんと叩く音 ※0―4秒（とんとん×

2回分）くらい

「大好きですよ……。ずっとわたしは、先輩のそばにいます。  
だから、安心して眠ってくださいね」

\*\*\*

⑬『【一か月前】わたしの『してみたけこと』リスト』（342文字）

五月。本編の一か月前。もう少しで定期テストの季節。

二人、主人公の自宅で一緒にいる。

みちるは今回もテスト勉強のため、休みをもらうことになっている。

それはすなわち、二人がしばらく会えないことを意味し、期間中は一切連絡も取らないことにしているのです、お互い、なかなかにつらいものがある。

そこでみちるは、ある提案をする。本編につながるエピソード。

【「今にも死にそうな声で」

先輩……悲しいお知らせです……。

【「これ以上苦しいことがあるのだろうか、という感じで」

此度もテスト期間が迫って参りました……。

これ、勤務希望です。この日から、二週間お休みを頂戴します……。

【『仕方がないこととはわかっていますが、辛いですね……。当店としても、わたくし個人としても、二週間にもわたる羽鳥様の不在は、耐えがたき痛手でございます』と言われ。主人公がのっけてきて、自分と同じ芝居がかった口調になっているので面白い。時代劇ごっここのようになっている】

はい。わたくしも身を切られるような痛みを感じております……。

そこでわたし……今回このようなものをしたためてみました。

その名も『してみたいことリスト』でございます。

内容は、名の通りでございます。

先輩と、してみたいこと。行ってみたい旅行先から、映画で見た憧れのシチュエーション。

果ては、個人的な妄想まで。もろもろ詰め込んでみてございました。

あっ壁ドンとか派手なのは 아닙니다……先輩のキャラクターを考慮した上で執筆しました

ので。

次に、お会いする時まで。これだったら、してもいいかな？  
って思えるものがほしい  
ましたら。

【明るく、嬉しそうに】

考えておいていただけたら……嬉しいです！」

アラームボイス1 「朝のご挨拶」(77文字)

「先輩。おはようございます。」

お目覚めの時刻ですよ。起きてください。

ふふ……寝起きでぼーっとしてる先輩、可愛いです。

今日も一日、わたしがお手伝いしますからね!」

アラームボイス2 「作業開始」(23文字)

「先輩。お時間になりました。作業を始めましょう!」

アラームボイス3 「休憩時刻のお知らせ(暖かい季節)」(41文字)

「先輩。休憩時刻ですよ。」

少しお散歩にいきませんか?

今の季節、お花がとっても綺麗ですよ」

アラームボイス4 「休憩時刻のお知らせ(寒い季節)」(60文字)

「先輩。休憩時間になりましたよ。」

今日は冷えますね……。

じゃあ、時間いっぱい、くっついていましょうか……。温めて差し上げます」

アラームボイス5 「もうすぐ終了時刻」(21文字)

「先輩。あと少しです! お茶をお持ちしましたよ」

アラームボイス6 「作業終了」(44文字)

「先輩。終了時刻になりました。今日もお仕事お疲れ様です。」

あの……この後お時間、ありますか?」

アラームボイス7 「就寝のご挨拶」(34文字)

「先輩。お休みの時間です。」

はい、ちゃんと手を握っていますよ。

……おやすみなさい。大好きです。今日も一日、先輩といられて幸せでした」